

春期福音特別集会（3）

何故我を善きと言うか——マルコ伝10・13～31

1973年3月22日（南房保田）

小池辰雄

幼児の如くに受くる者ならずば 受けとると、入る 福音的律法 キリストの中へ投げ棄てる
神は凡ての事をなし得る 祈り

【マルコ10】

13 イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子たち禁めたれば、14 イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来るを許せ、止むな、神の国は斯くのごとき者の国なり。15 まことに汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず』16 かくて幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

17 イエス途に出で給いしに、一人はしり来り、跪づきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』18 イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。19 誠命は汝が知るところなり「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」「欺き取るなかれ」「汝の父と母とを敬え』20 彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』21 イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う『なんじ尚お一つを欠く、往きて汝の有てる物をことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』22 この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

23 イエス見回して弟子たちに言いたもう『富ある者の神の国に入るは如何に難いかな』24 弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答えて言い給う『子たちよ、神の国に入るは如何に難いかな、25 富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』26 弟子たち甚く驚きて互に言う『さらば誰か救わるる事を得ん』27 イエス彼らに目を注めて言いたもう『人には能わねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るなり』28 ペテロ、イエスに対して『我らは一切をすてて汝に従いたり』と言い出でたれば、29 イエス言い給う『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、30 誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と



共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。31されど多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし』

● 幼児の如くに受くる者ならずば

マルコ伝10章の13節。

13 イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子たち禁めたれば、14 イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来るを許せ、止むな、神の国は斯くのごとき者の国なり。15 まことに汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず』16 かくて幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

これだけでもう福音なんです。この13節から31節までをここでもつてジーツとみんな読んでね、私は何も言わないで、そのうちに誰かが知らない間に異言になってしまつて、それで祈祷会になる。これが最高なんだけれども、まあ今日はその最高の世界はちよつとお預けにしておこう（笑）。

「イエスの触り給わんことを望みて」

という。人間の感覚の中ではこの「さわる」というのが一番直接的です。見る、聞く、嗅ぐ、触感的に感ずる、ふれるというやつ。直接的にキリストがさわると、これは按手、聖霊のバプテスマになる。私はあなた方に時々、祈祷会で按手するけれども、滅多に頭の上には手を按かない。それは最初に背中の上の方に按く。そして、キリストの見えざる御手があなたの方の頭に按手なさっている。ちようと、白隠の「隻手の音」というように、片一方の手で——如来の手がこつち側にくる——如来の手と合わせて、合掌になる。私はそう解釈しているんですよ、それが本当かどうかしらんけれども。

これは今度はキリストでいく。片手で合掌する、祈りの世界で。そしたら、イエスの方からグーッときて、皆さんの方に流れていく。これはそうなんです、縦と横なんです。さっきの「義と愛」という話もありましたが、あの通り「縦と横」。「わが義と愛」というのは非常に大事なところですよ。

そういうようにして、キリストが按手してくださることをお母さんたちが望んだ。そうすると、弟子たちは分からないものだから、

「子供なんてものはうるさい」

なんてなわけだね。キリストは、

「こんでもない、お前たちは、何を考えているか！ キリスト道は一切そうではない。わが道は、そんな七面倒くさい難しいものではないぞ。こういう幼児の如くならないで、やれ神学だ、聖書解釈だのと、そんなのではないんだ」

と、まあいうわけです。これが、



「いぎどおりて言いたもう『^{おきな}幼児らの我に来るを許せ、止むな、神の国は斯く^かの^{とき}とき者の国なり。凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、

「受くる者ならずば」と。今度は「信ずる」ではない。昨日は「信ずる」という言葉だったが、今度は「受けとる」と言う。信仰は神の業であるという。

「神の業は信ずる是なり^{これ}」

という。「受けとる是なり」なんだ。「信ずる」ということと「受けとる」ということは一つ。「受けとる」というのは非常に具体的な言葉なんだ。体受する。体^{からだ}で受けとる。からだで体受する。幼児のごとく体受しなければと。今度は、「入る」という。それに入るという。受けとったり、入ったりと、これはもの凄い直接的な言葉だ。私はこれが大好きな言葉なんだ。

「^{おきな}幼児の如くに神の国を受けとる者でなければ之に入ることができない」

と。実に幼児は単純に、幼児の在り方は——私は朝子という孫をよく送りに行ったり、特に迎えに行きますけれども。学校から帰ってきて真っ先にカバンを置くと、自転車で保育園に迎えに行く。そうすると——全く彼らの世界は何とも言えないんだ。見ているだけで、天国なんだよ、正直。保育園の先生というのはいいなあと思うよ。また、先生たちが本当に幼児のような気持の人たちで、これはたまらないですよ、私は。連れて帰るのがなにか可哀相みたいな気がする。

「おじいちゃんはどう来たか」

なんてな顔をする（笑）。そうすると、保育園の先生が、

「朝子ちゃんのおじいさんはやさしくていいね」

なんてね（笑）。

これに「入る」という、そういう世界です、イエスさまは。だから、日曜学校の

「主われを愛す、主はつよければ」

と、あれは讃美歌のアルファでオメガですよ、あの「主われを愛す」（461番）は。これは本当に讃美歌の始めでまた終わり。あれを大いに歌っていいわけです。

16 かくて^{おきな}幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

これは祝福されて、キリストの霊が伝わる。天使が守る。それが段々大きくなるにしたがつて、神さまを離れて、悪いことを考えている。特に男が悪い（笑）。まあ天国は、

「女がまず成仏する」

と日蓮さんが言ったけれども、日蓮さんはよく分かっている。男はその次。天国で上になつてゐるのは、女上位だよな、天国では（笑）。地上と反対であります。

● 受けとると、入る

17 イエス^{みち}途に出で給いしに、一人はしり来り、跪^{ひざまず}づきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣^{つぐ}ぐするためには、我^ななにを為すべきか』



ここにも、

「なにを為すべきか」

が出てきた。ちょうど昨日の話と好一对なんです、ここは。

「永遠の生命を嗣ぐ」

という、まず「永遠の生命」を問題にしたところが非常にいい。一番大事な問題を持ってきたわけだ。

「世界は何ぞや。教育は何ぞや」

ではなくて、永遠の生命とは「何ぞや」ではなくて、ここは「嗣ぐべき」という、非常に実存的な問題なんです。認識の問題ではなくて、実存の問題。ユダヤ人はやっぱり実存的な民だからね。

「私は何をしたらいいか」

と。「どう考えたらいいか」とか、「いかに見たらいいか」「いかなる人生観を持ったらいいか」とか、そんなことではない。

「何を為すべきか」

という、行為の実存の問題。これは、問は非常に正しいんだ。

そしたら、イエスが、その問が正しいかと思ったら、まず問の中の或るところをピシャツとやつつけられた。

18 イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。』

これは私の大好きな、キリストの言葉です。こういう言葉が好きだというんだからおかしい。この言葉を本当に瞑想して下さい。そうしたら、神の子キリストが

「なぜ、私のことを善いと言うか」

と言うのに、我々みたいな、地上の誰が自分を善いと言えるかというんだ。とんでもない話だ。もう口がふさがってしまう。もう何にも、自分のこは全然問題にならない。よく「価値の問題」とか何とかいうけれども、価値もヘツタクレもありはしない。全然、無価値です。自分というものは無価値、問題にならない。まず自分が本当に問題にならないやつだということ、これを徹底的に受けとる。

それだから、これが好きなんです。主さまのこの言葉の中に自分を入れる。

「この言葉を受ける者でなければ、このキリストの現実に入ることができない」

というのと同じことです。自分を無善としていたら、そしたら、神の「至高善」(summum) (summu) bonum(ボナム)最高善)の中に、彼は完全に自分が入ってしまうんです。キリストは「入っている」人間なんだよね、神の懷の中に。入っている人間、神の中に。突入している人間。

いいですか。受けとると、入る。信ずるとは完全に圧倒されて、もう何と言いますかね、もう何とも言えない寸分ズレのない世界。そして入ってしまうんです、この中に。



● 福音的律法

19 誠命は汝が知るところなり
いましめ

これはユダヤ人だからね、すぐ律法のことをキリストは持ってきたわけです。

「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」「欺き
あざむ

取るなかれ」「汝の父と母とを敬え」』

これはモーセの十誡の第五誡からあとを全部言われたわけです。一、二、三、四は省略した。

新しい方もおられるから言いますけれども、「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」は、人間関係の一番悪いやつ^の三つの関係。要するに、民法のまた刑法の一番やつかいなやつ。ところが本当は、

「殺すなかれ」

ではなかった。

「お前は殺人はしないぞ、殺人はしまいぞ」

というような気持だね。神さまはモーセを通してイスラエルの民に——あれは「なかれ」ではないんです——「殺人はしまいぞ」といつて、むしろ信じかかっている。

「何となれば、私がお前の神であるから。私がお前の神であるから、お前は殺人なんかできないね。姦淫なんかできないね。ドロボーはしないね」

と。北京の旅館に日本の高官が行つて、部屋に鍵がないから、「鍵がないか」と聞いたら、

「この北京には鍵は要りません」

と言われたそうだ。中国は大したもんだ。日本は負けですよ、その点では。日本くらい乱れたしょうがない、これは三等国か四等国だよな。「タバコは吸殻入れに入れろ」といくら言つても、そこらに散らかしてしまふし、全くしょうがないよ。映画館に——まあ滅多に平気で喫煙している。もうとにかくなくなつちよらんですよ。それから、いつも言う通り、電車の中で若いのがふんぞりかえつていて、お年寄りが立つていても知らん顔している。何事かと言うんだ、日本人は。そういう道徳が——なにも社会道徳なんて言わなくなつて——そういう事が自然にいかないということとは、根底に本当に深い宗教がないからです。

いくら「道徳、道徳」なんて言つたつてダメなんだ、神の義ということが分かつてないから。本当に縦の線がしっかり立つてないような日本だから。この縦の線はいつたい何かと思つたら、実は神さまが信じかかっている縦の線だった。律法ではなかったんです。モーセの律法の奥には実は福音が隠れていた。福音的律法なんだ。ところが、ユダヤ人はこの「福音的律法」の「福音的」を取り損なつて、外側の律法にしてしまったわけだ。隠された律法であつたんだ、本当の律法は。

だから、私は学校で生徒に言う。

「お前たちはよく勉強する。ゆえに試験はしない」



と。そういうと、みんな笑うけれども。本当はそういう学校にしたいんだけど、「お前たちはよく勉強しないから、やむを得ず試験をしているんだ」と。仕方がない。お前たちは勉強すれば、ことに中間試験なんてやりたくはない。先生方は大変だよ。ところが、なかなかそれに応えてくれない。

結局、そういった気合なんです、気魄なんです。気魄があれば——人間だから、それは時に躓いたり転んだりするよ——いいよ、本当に気魄を持ってくれば。

●キリストの中へ投げ棄てる

20 彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』

そういったところが、なかなかこれは、いわゆる感心な青年だよ。

ただし、それは外側なんだけれども。まあとにかく、一応守ってきた。

「うむ、そうかい。感心だね」

というわけで、

21 イエス彼に目をとめ、愛^{いつく}しみて言い給う

「目をとめて愛しみて」というから、非常に深いキリストの顧みですよ。

「本当に結構だね、まあ感心だよ」

と。だけれども、ちよつとまだ。

『なんじ尚^なお一つを欠く、

「なお一つを欠く」というのは実は、

「本当の一つを欠いているぞ」

ということ。一番大事な肝腎^{かなめ}要^{かなめ}一つが欠けているぞと。律法はいくら守っても、一番要^{かなめ}が欠けているぞと言う。

往^ゆきて汝^もの有^もてる物をことごとく売^うりて、貧^ひしき者に施^せせ、

キリストはその青年を見るとすぐ分かるんです、「これは金持ちの青年だな」と。貧乏人ではない。金持ちで裕福で、そしてとにかく一応立派に暮らしている。けれども、どこか、その一番欠けているものがある。だから、「みんな売^うつてしまえ」と。そして、

貧^ひしき者に施^せせ、さらば財^{たから}宝^{たから}を天に得^えん。

地上の宝はみんなダメだよ。どんなに持っていたって、次の世界に往く時にはみんな裸で往くんだから、何一つ持つていくわけにいかない。

「この聖書だけは持つていこう」

なんてダメだよ。私はこの聖書を持つていきたいけれども、これも持つていくわけにいかない。聖書も置いていかなければならない。これはどうしたらいいですか。聖書はみんな食べてしまわなくては、黙示録のヨハネみたいに。

且^{かつ}（かつ）きたりて我に從^{したが}え』



さあ畳みかけてキリストは難問題をそこにもちかけた。それでたまらない。

²²この言によりて、彼は憂^{うれい}を催^{もよお}し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産^{おおい}をもてる故なり。

申し上げている通り、これは金持ちであつた。あなた方はもし非常に学問ができたなら、

「その学問を棄てろ」

と。ランニングのチャンピオンだったら、

「その足を棄てろ」

と。乱暴なことを言うです、キリストは。一番その人が大事と思つているものを「棄てろ」と言う。「これだけは困ります」というものを棄てろと言う。そういうことは何かという結局、そのものにおいて自分を惜しんでいる。実は自分を惜しんでいる、その惜しんでいる自分を棄てろと。

「自分を愛することは亡びである」

〔総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ〕

とは西郷南洲も言っている。そういう、

「己を憎まずば、わが弟子となることはできない」

と。キリストに従うときには、

「己を憎まなければ従えない」

という、もの凄い世界です。自分を愛^{いっく}しんでいるうちは従えない。まあ烈しい世界です、福音の世界は。

「それでは福音なんかとてもやり切れない」

と。「キリスト教」なんていつて、勿体ぶつたつてダメなんです、本当は。もうキリストの言葉は全部これ落第ですよ、本当にぶつかつたら。誰も出来ないことをくどくど言つておいて、福音とは何事だと。

これは一つ秘訣がある。「棄てる」と言つたつて、どこへ棄てるんですか。キリストの中に棄てるんです、自分を。キリストの中に自分を投げ棄てるんです。そうしたら、エライことになる。

「キリストの中へ投げ棄てる」

ということとは、

「キリストの中へ入る」

ということなんです。いいですか。あるがままで、整えなくていいから、そのままいいからキリストの中へ入つていく。それが本当に

「キリストを受ける」

ということと、

「キリストの中に入る」



ということが、これがまた一つなんです。「受ける」ことと「入る」ことが一つなんです。

「受けてから、それからひとつ入りましょう」

なんてではない。本当に受けたら、入ってしまうんです。本当にキリストの中に棄てたら、本当にキリストを受けとることになる。

いいですか。それで、私たちは今晚このキリストに入るということ。あなた方はもしこの廊下を通って向こうへ歩いて行くとすると、一步ごとにキリストの中に入っていかなければダメです。「入って行かなければダメだよ」ではなくて、「入って行くのです」よ。すべて我々の行動が全部キリストの中に入っていく行動である。キリストの中に入っていく自分の姿である。入ってまた限りなく入っていく。キリストというのは深いんだから。

「これで入ってしまった」

なんてダメだよ、限りなく入って下さい。このキリストが、

「持てるものごとごとく棄てる」

と言うことは、

「いいから、そのまま——もし惜しければそのまま持っていて、けれども——お前

は入ってこい」

と。そうしたら、入る時には自然にそれはとれてしまう。棄てようとしなくなつて、棄てられてしまうよ。そのことです。「棄てよう」と意気込んだつてダメです、あとからまた惜しくなるから。入っていけば、棄てられてしまうんです、自ずから。自分が本当にキリストの中に入れば——あのパウロが言っている通り、

「我有て^もれども無きがごとし。無けれども有るがごとし」

という、あの境地がこのキリストの中に入ると、相対的な「有るとか無い」とか、やれ「道徳的にどうである、こうである」とか、「まだ愛し方がどうである、こうである」とか、「潔いだとか潔くない」だとか、そんなことは全部問題でない。

●神は凡ての事をなし得る

さつき実は、あなた方の讃美歌を聞いていて、歌詞に「……ことごとく潔めよ」なんてある。いいよ、潔まらなくなつて。そのまま入っていけば、キリストが潔めてしまうんです。何か相対的に考えているうちはダメです。絶対の世界はもう、グッとそのまま入る。そのまま入ったら、キリストが化学的变化以上の霊的变化を起こしてくださる。キリストの霊的变化が起きる。我々はこうやっていても、天使が皆さんを守っている。霊光が入っている、貫いている。もうこれだけです、その他にない。だから、

²³ イエス見回して弟子たちに言いたもう『富ある者の神の国に入るは如何に

難い^{かた}かな』²⁴ 弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答えて言い給う『子^{みことば}たちよ、

神の国に入るは如何に難いかな、²⁵ 富める者の神の国に入るよりは、駱駝^{らくだ}の



針の孔あなを通るかた反かえつて易やすし」

「針の穴」という名前の狭い門があつたんだよな。本当の針の穴ではないよ。「針の穴」という名前の狭い、ラクダがなかなか入れない門があつた。そこに入る方がなおやさしい。ということとは、「富める」というのは要するに、自分を何ものかと思つている。自分を何ものかと思つているやつはいつまでたつてもダメだと。何かにおいて自分を信じている者はみんなダメだと。

そのまま、あるがまま、自分をキリストの中に棄てる。棄て場所はキリストの中であつたということをはッキリ覚えていなくては。わが身の棄て場所はキリストの中である。このキリストの中に棄てたら、今までの自分がどうであらうと、もの凄いいことになつていく。もう概念の分析はよしなさいよ。そんなのとは違ふんだから、我々の福音は。もうダメです、そこらの神学者は。私はハッキリと今度の『無者キリスト』〔1975年刊〕に書くから。

26 弟子たち甚いたく驚おどろきて互たがいに言う『さらば誰か救すくはる事を得ん』

そんな人間的な相対的判断でいうなら弟子たちの言う通りなんです。

27 イエス彼らに目を注とめて言いいたもう『人には能あたわねど、

お前たちはいくらそうやつて分析してやろうとしたつてダメだよ。けれども、

神しかには然しからず、夫それ神かみは凡すべての事をなし得るなり』

「自分を本当に、神・キリストの中に棄ててみる。神さまは驚くべきことをなして下さる」

と。本当にそうです。新しく、

「人新たに生まれる、新たにつくられる」

とかいうことは、これは直ちに御霊の臨んでくる世界です。

「聖霊はどうして受けますか？」

もへツタクレもない。もうハッキリ、来ますから。

28 ペテロ、イエスに對むかいて『我らは一切をすてて汝に従いたり』

彼はすぐそういうことを言う。なるほど棄てたよ、一時的には。なかなか氣負っているんだ。けれども、彼はまた躓つまづいてしまう。

と言いい出でたれば、29 イエス言い給う『まことに汝らに告ぐ、我がため、福

音のために、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、

或いは恋人——書いてないよ——だけれども、そうだ。

或は田畑をすつる者は、

何でもそれを棄てる者は、

30 誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。

例外者は一人もないですよ。

「神——キリスト——我」



というこの一直線の中には何ものも入ってきてはいけない。そして、その他の一切のものは無条件に棄ててしまう。全部棄ててしまう。これは烈しい。けれども、自分を本当に投げ入れれば、さつきから言っている通り、自然に救われているんです、自然に。その縦の関係を百パーセントに立てざるを得ない。それを、

「あれだけは、神さま、ちょっと勘弁して下さい」

なんてダメだよ、それは。それを勘弁してもらったら、今度はかえってダメになる。ところが、本当に中に入ってしまうと、今度は、

即ち家・兄弟・姉妹・母・子・

恋人、今度はまた入れてやるよ。

田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。

それが全部、今度は正しい意味で復活してしまう、本当の意味で全部。いいですか。ということは、みな神の国の民にしてしまうわけです。人間的相対的判断を乗り越えたものにしてしまうわけです、今度は。

いいですか。皆さん、本当に人を愛するとは、本当にその人を変えてしまうことなんですよ。とにかく、入ること。自分が本当に入ると、今度はそこからの凄いエネルギーが出てくるから。それは本当ですよ。だから、さつきどなたかが仰った通り、

「祈る他には何もできない」

と言うけれども、祈りが一番力強いわざになる。何かしたなんていうことよりも、その人のためにグーッとキリストの中に入ったら、自分が祈らざるを得ないですよ。祈らざるを得ない。もうそこから爆発せざるを得ない。爆発せざるを得ないものがもの凄く、地球の向こう側のアルゼンチンにだって、この祈りが届いてしまうんだ。これは電波の世界よりか凄いんだから、この霊波の世界は。そういう、もう地球を完全に抱いてしまうんですよ、この祈りの力は。地球を抱くような力です。だから、キリストが、

「この山に移れと言え、移る」

というようなことを、極端なことを仰るのは、そういった霊的現実のことを言っておられるんですよ。だから、もの凄いです。キリストがウワツと思えば、もう向こうの方の病人がパツと癒えてしまっている。そんな世界です。それは主イエス・キリストの中に本当に入れば、そうなるんだから。我々の側が、「どうである、こうである」とか、「霊的である、どうである」とか、そんなことではないですから。

そういうようなことで、もう永遠の生命がやってくる。まあそこまでは書いてないけれども、

「永遠の生命がやってきて、その永遠の生命を人に与えることになる」

と、先まで読んでしまうんです、御霊は。私たちのこの聖書の読み方は、聖書がまだ言えないで呻いているものがちゃんと聞こえてくる。いいですか。(異言)。はい、そこまで。あ



とは祈ります。

● 祈り

あなたはその青年を本当に惜しまれました。

「お前はよくやって来たな。しかし、なぜ、私のことを善いと言うかね。神さ

まの他に何も善いものはないよ」

と。主さま、このように言って下さったあなたが本当に神さまと一つでいらつしやったから、本当に私たちはただあなたの中に入って、幼児のごとくにあなたを受けとり、幼児のごとくにあなたの中に入ります。もうその他の何も考えません。

主さま、自分をあなたの中に棄てます、あなたの中に投げ棄てます。そうすれば、あなたは最善を私たちの中に本当に霊的变化を起こして、私たちを知らない間にあなたのもので、あなたと同質なものに変えて下さるから、感謝であります。

主さま、どうぞ、あなたの驚くべき……

主さま、本当に一人びとりは一切のものを顧みません。そうするときに、あなたはすべての者を本当に救いあげていくところの驚くべき者にして下さるから、感謝、感謝。主さま、一人びとりはあなたの御光と愛と力とでもって……

はい、祈りを静めて。はい、沈黙の祈り。

「われキリストと共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるにあらず。キ

リストわがうちにありて生くるなり」

と、パウロと共にかく本当に告白することのできるこのご恩寵を感謝いたします。……

〔以降録音切れ〕

